

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
生きる力を身に付け、地域の思いを受け継ぐときわっ子の育成	① 学校や家庭、地域との連携を強化し、官民一体型学校づくりを推進して、信頼される学校づくりをめざす。 ② 基礎的な知識技能の定着と「言語活動」の充実を図り、活用力の向上をめざす。 ③ 児童が自ら進んで生き生きと取り組む教育活動の活性化を図る。 ④ 教職員の協働研修(ICT利活用の研修も含む)を実施する。

到達度
 A: ほぼ達成できている
 B: 概ね達成できている
 C: やや不十分である
 D: 不十分である

3 目標・評価

① 学校運営: 学校や家庭、地域との連携を強化し、官民一体型学校づくりを推進して、信頼される学校づくりをめざす。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題	具体的な改善策・向上策
学校経営	○学校経営方針	学校目標や本年度の重点目標の周知	・児童、保護者、教職員、地域に周知し、「学校の様子が分かる」と答える保護者を90%以上にする。	・学校便り、学校ホームページ、ケーブルテレビ、全校朝会、育友会活動等で周知する。	A	☆学校便りの発行、ホームページの更新に心がけ、今年度の重点取組等について育友会役員会等でも周知を図るようになってきた。保護者アンケートの「教育方針・学校の様子を積極的に伝えている」は概ね思うの回答も入れると100%であった。 ☆教職員の教育目標の具現化については、個人としての評価が上がってきている。 ★重点取組として、ICT利活用、官民一体型学校は十分周知できたが、学力向上の面においては意識の向上が課題である。	・学校の経営方針や学校目標について、機会をとらえて保護者や児童に周知させていく。児童に対して、行事や集会のうちに、どのような学校目標や児童信条につながっているのかを意識させるように話していく。 ・HPや行事での保護者への説明では、行事の内容だけではなく、学校目標での位置づけやねらいについて意識できるような話し方をしていく。
学校運営	○危機管理	危機管理体制の整備	・児童の交通ルール遵守に対する意識を高める。 ・教職員及び保護者の危機意識の向上を図り、交通事故防止、生活事故防止に努める。	・年度初めに交通安全教室を開き、児童の道路歩行及び自転車の安全な乗り方の指導を行う。 ・日常の点検及び月1回の安全点検を確実にし、教職員の意識向上とともに校内の安全管理に努める。 ・学校だよりや学校ホームページ、学級通信等で保護者に学校での取り組みを紹介し、保護者との連携に役立てる。	A	☆毎月の安全点検をきちんと実施することができた。改善すべき点についてはきちんと対処することができたため、職員アンケートでも意識が向上している。 ☆交通安全に関わる指導や生活のきまりについては、事故につながりそうな場面について機会をとらえて指導を行ってきたため、児童の安全に対する意識は高まっている。 ☆年度当初に交通安全教室を実施したことにより交通安全の意識が高まった。また、防犯ブザーも毎月チェックすることにより所持率が高まった。 ☆危険箇所点検や通学路パトロールは保護者に頼っている部分が多い。職員の意識も高めるべきである。	・安全点検において気になる点については必ず職員間で共通理解を図る。 ・交通安全や事故防止についての対策について保護者へ周知をする機会を増やす。 ・職員による通学路点検やパトロールを定期的に行う。 ・緊急時の連絡体制について、関係機関を交えての訓練を行う。
学校運営	○家庭・地域と連携した開かれた学校づくり	学校情報の公開と連携	・毎月1回のノーテレビデーの実施率を90%以上とする。 ・学校便りは月2回以上、ホームページの更新は週1回以上行い、学校情報を流すことで教育活動に関心を高める。 ・地域人材の登用を各学年年間1回以上取り組む。	・毎月初めのノーテレビデーでは取組レポートを提出してもらう。 ・児童の活動の様子をカメラなど随時記録し、多くの広報活動の資料に活かす。 ・公民館など関係機関と連携して、地域人材の更なる発掘と授業や行事での登用に努める。	A	☆ノーテレビ、ノーゲームデーの取組が各学級でよくなされており、全体で90%近くの実施率であった。 ☆学校だより月2回、ホームページ更新週に1回のペースで情報を発信することができた。橋町公民館報に毎月、2例、児童の教育活動を写真と説明文で紹介することができた。保護者アンケートでも好評価を得ている。 ☆公民館との連絡をさらに密にしたことで、町の各種団体と連携した活動を十分に行うことができた。	・ノーテレビ・ノーゲームデーにおいて、読書活動の充実を図れるように「家読」の啓発をしていく。 ・ホームページの内容を充実させるようにする。 ・生活科や総合的な学習以外の教科の内容につながる活動や人材登用ができるように「人材マップ」を作成する。
		官民一体型学校づくりの推進	・「花まるタイム」「青空教室」「なぞペー」を実施することにより、学習に対する意欲の向上、学習習慣の定着、基礎的な内容の定着、思考力の基礎を養うことをめざす。	・学校支援地域本部と連携して「花まるタイム」を計画的に実施する。 ・「青空教室」「なぞペー」は、学年の実態に応じて計画的に実施する。	A	☆週4回の「花まるタイム」を実施することにより朝から元気に学習に取り組めるようになってきた。 ☆地域支援員の方に丸つけなど行ってもらい、地域の方との交流が深まってきた。 ☆「青空教室」では、体を使い思考力を高めるような課題に児童は積極的に参加した。また、高学年はリーダーシップを発揮できるようになってきた。	・「花まるタイム」は、今後続けていく上でマンネリ化を防ぐための内容や指導方法の工夫が必要である。 ・地域支援員の方と連携を深め、計画的に「青空教室」などの支援を受けていくようにする。

② 確かな学力の向上と定着: 基礎的な知識技能の定着と「言語活動」の充実を図り、活用力の向上をめざす。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	到達度	成果と課題	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	基礎学力の定着及び活用力の向上	・児童が学ぶ意欲を高め、自発的に学ぶことのできる授業づくりを行い、基礎学力の定着と活用力の向上をめざす。 ・「授業がわかる」という児童を80%以上にする。 ・国や佐賀県、武雄市の学習状況調査において、全学年、全項目の佐賀県や武雄市の平均正答率を上回ることをめざす。 ・個に応じた指導支援の充実を図る。 ・図書館貸出し数 一人100冊以上をめざす。	・国語科算数科を中心として言語活動を工夫し学び合いのある授業研究に取り組み、校内授業研究を充実させる。 ・学習状況調査等の結果を分析し、児童の実態に合わせた手立てを考え、指導方法の工夫改善に取り組む。 ・スマイル学習を利用した学び合い学習の充実を図る。 ・授業の内容と連動し、主体的に学ぶ力を高める家庭学習を工夫する。 ・「花まるタイム」を充実させるとともに、補充学習(毎週火曜日の放課後)を計画的に実施する。 ・図書環境の充実を図るとともに、テーマを設定するなど、児童の意欲と質を高める読書指導を行う。	B	☆児童アンケートでは96%が「毎日の授業はだいたいわかる」と答えている。 ☆国・県の学習状況調査ともに平均正答率を上回った。結果を分析し、特に定着が低い内容や領域について問題の意図や意味を解説し、補充指導を行った。 ☆朝、週4日の「花まるタイム」では、音読、計算、パズル、視写を取り組み、基礎学力や集中力を高めることができた。 ☆図書の利用については、全校的に取り組み、全児童一人当たりの平均貸出数は90冊を超えた。季節や行事にあった本のコーナーや月2回のお話会の時間に読んでもらった本のコーナーを設けるなどして、児童の読書への意欲が高まるようにした。 ★研究授業は全員実施したが、基礎学力の定着や活用力の向上との関連をもう少し深める必要がある。	・学習状況調査の結果、思考力や記述を問う問題についての指導を充実させる必要がある。言語活動をどのように授業に組み入れれば効果的であるか検証していく必要がある。 ・スマイル学習を含めた単元計画を考えながら、ICT機器を有効利用しさらに効果的な指導を学校全体でおこなっていくようにする。 ・補充指導の在り方や家庭学習の在り方について検討し、全職員で共通理解を図りながら実践できる手立てを考える。 ・おすすめの本を読破した児童や貸出冊数100冊を達成した児童名を掲示するなど児童の読書意欲を高める手立てを考える。
特定課題	○小学校低学年の学習環境の改善充実	基本的な生活習慣・学習習慣の定着	・「早寝・早起き・朝ご飯」を奨励し、生活のリズムを整えるなどの目標達成率90%以上をめざす。 ・話す人を見てうなずきながら最後まで聞くなどの学習習慣の達成率90%以上をめざす。	・児童と保護者による「ときわっ子生活ふり返りカード」への記入により、基本的な生活習慣の定着を図る。 ・話し方や聞き方のモデルや約束を提示し、定期的に振り返らせる。	B	☆「ときわっ子生活ふり返りカード」を毎日家庭で記入し、自分の生活習慣を振り返らせることによって基本的な生活習慣が定着してきた。また、家庭との連携を深めることができた。 ★朝ご飯を食べてくる児童は90%以上であるが、早寝早起きなどの生活リズムが乱れ気味の児童もいる。保護者アンケートでも家庭での意識が昨年度より低くなっている。	・生活習慣や学習習慣について職員間で確認をし、橋小のルールとしてまとめ、共通理解を図りながら全職員が同じ指導ができるようにする。 ・授業に限らずいろいろな場面でペアタイムなどを取り入れ、話し方や聞き方の約束を身につけさせる。

③ 豊かな心を育む教育活動の推進:児童が自ら進んで生き生きと取り組む教育活動の活性化を図る。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	到達度	成果と課題	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	心の教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動全体を通じた道徳教育の充実を図る。 ・家庭や地域、関係機関と連携した体験活動の充実を図る。 ・違いを認め合い、支え合い、つながり合う仲間づくりをめざす。 ・「人権」尊重の意識を常にもって全ての教育活動に当たる。自分も友達も大切にできる児童を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年間35時間(1年生は34時間)以上の道徳の授業を計画的に行い参加型授業を推進する。 ・勤労生産学習(ときわっ子体験活動)と関連させた道徳の授業を計画する。 ・「ふれあい道徳」を実施し、保護者や町民に道徳教育の状況を公開する。 ・職員が率先垂範する道徳教育(立腰、トイレのスリッパ揃え等)を推進する。 ・人権集会や人権週間を設定し、児童・保護者・地域への啓発や発信を積極的に行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ふれあい道徳の実施、年間35時間以上の道徳の授業は計画的に取り組むことができた。 ・立腰やトイレのスリッパ並べ等は職員が率先して取り組み、児童への啓発ができた。 ・人権週間・集会を実施し、児童の人権に対する意識は高まったと思われる。学級便りや学校便りで、家庭に様子を伝え、家庭でも人権について話し合うきっかけづくりができた。 ・★勤労生産学習(ときわっ子活動)と関連させた道徳の授業への取り組みは、十分にできていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳の教科化へ向けて、勤労生産学習や体験活動などと関連させた年間計画を整備していく。 ・人権同和教育の年間計画について検討する場を設定し、児童の実態に合わせたより効果的な指導内容を取り入れて実践する。 ・人権週間や集会の取組だけでなく、年間を通して各学級で人権について考えたり話し合ったりする機会をつくり、児童の人権意識を高めていく。 ・あいさつや言葉遣いに対する効果的な指導方法を検討し、実践する。
教育活動	●いじめ問題への対応	いじめの未然防止・早期発見・早期対応に向けた体制づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校やいじめに対して、未然防止・早期発見・早期対応に適切に対応できる教育相談体制を充実させ、関係機関等との連携強化に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめに関するアンケートを毎月末に実施し、状況把握に努める。 ・Q-Uを5月・10月の2回実施し、学級での児童の状況を把握する。 ・担任と児童の個人面談を、5月・11月の2回実施し、児童の状況を把握し、適切な対応に努める。 ・察知されたならば、児童との面談後、「認知」、「認知」の判定を行い、状況によっては、22条委員会を設置し適切な対応に努める。 ・事案の解決に向けては、学校として、組織的、計画的に取り組む。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・☆生活アンケートは、毎月実施することができた。状況把握についても、各担任で児童に個別に聞き取りをしたり、学級全体に返して指導をしたりしている。気になる事案に対しては担任が早期に対応し、必要時家庭とも連携を図り取り組むことができています。このことで、児童の多くは、安心して自分の感じていることや思っていることを書いています。事案の解決に向けて組織的に動くことができています。 ・☆年間2回Q-Uを実施し、その結果に基づいて学級支援会議を実施し、状況の把握に努めることができた。全学年の職員で今後の指導の方向性や内容について検討して共通理解を図り、組織的に対応ができるよう取り組むことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も毎月のアンケートを続けることによって、児童の実態把握に努める。 ・児童との面談の時間を確保する。 ・支援が必要な児童は学級の人数に対し多いと考えられる学級が多く、学級支援会議では時間も限られているため、より緊急性の高いものに焦点をあてて進行をしていく。 ・Q-Uの結果を関係職員で確認する際、可能であればスクールカウンセラーも同席する等し、専門的な視点を取り入れ、対応することができるよう調整していく。
教育活動	○体験活動	「ときわっ子体験活動」を中心とした体験活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・稲作体験、野菜づくり、サツマイモ栽培等の体験活動を通して、勤労生産の意義や作物と自然との関わりを学ばせるとともに、地域の思いや願いを大切にしようとする意識を高める。 ・保護者の参加率を6割以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の体験活動を見直し、事前指導を行ってから活動に臨ませる。また、事後の振り返りをさせ、その後の学習につなげる。 ・保護者及び関係団体に年間計画を配布したり、情報を早目に伝えたりすることで、保護者及び地域の方との連携を図る。 ・育友会施設部との連携をとり、より円滑な運営ができるように心がける。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・☆「田んぼの学校」では、保護者や関係団体との連携を図り、計画的に実践することができた。学習内容についての事前・事後指導も十分にを行い、総合的な学習としての成果をあげることができた。 ・☆夏野菜・冬野菜作りでは、事前指導をしっかりと行い、児童の疑問や発見を大事にし、主体的に活動ができるように配慮した。営農学級の方にも、活動の目的や今後の見通しを伝え、連携を図ることができた。 ・☆芋畑の草取りや芋掘り前の蔓切りなどを経験し、老人会の方々がこれまでしてくださっていたことのありがたさを感じる事ができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・営農学級の方々とは十分に事前打ち合わせをし、活動の流れを確認しておく。 ・芋づくりは3年生を中心に低学年で行うなど、学年を絞って活動することで、児童の思考力や表現力につながる体験活動にしていく。 ・体験活動を他の教科領域の学習や道徳と関連させ、体験を生かした学習へとつながるように、年間指導計画を考えていく。 ・地域の方とのつながりを児童に意識させ、日頃の挨拶や感謝の気持ちの表現などにつなげる指導をする。

④ 教職員の資質や指導力の向上:教職員の協働研修(ICT利活用の研修も含む)を実施する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	到達度	成果と課題	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	授業研究及び職員研修の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・一人1回の研究授業を行う。その際講師招聘を2回以上行う。 ・授業研究会や研修会等に積極的に参加し、自己の授業力向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究において、研究授業を計画的に実施する。 ・授業研究協議会の持ち方を工夫し、「言語活動の充実」や「学び合い」といった視点での反省を行い、その後の授業実践に生かせる具体的な手立ての実践につなげる。 ・教育センターの講座や夏季休業等の研修会に参加し、職員相互で意見交流をする場を設定する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・☆校内研究は、「言語活動の充実」や「学び合い」を中心とした授業の在り方について、ICTの利活用も図りながら取り組むことができた。 ・☆全員、国語や算数を中心とした授業の中で、特別支援学級担任は「自立活動」で、養護助教諭は「学級活動」で研究授業を行った。級外職員は理科で研究授業を行った。 ・★校内研が十分に深く進んだとは言い難い。次年度の方策を年度内に行い、新指導要領にも対応させたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究では、児童の学びの主体性を育て、自らの考えを上げ深める対話的な学びができることをめざし、「学習規律の徹底」「交流の場を深めるような課題提示や発問の工夫」「学習形態や場の工夫」を実践していく。 ・活発な授業研究会となるように意見交流の方法等を検討していく。 ・夏季休業中等等を利用して、授業研究の講座や研修会に参加し、授業力向上に努める。
教育活動	●教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	授業研究及び職員研修の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレットやデジタル教科書、デジタルコンテンツ等の効果的に利用した分かりやすい授業づくりをめざす。 ・「ICT(電子黒板やタブレット等)を使った授業は分かりやすい」という児童を80%以上にする。 ・ICT利活用教育の質の向上を図るための職員研修を2回以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報教育推進リーダーやICT支援員を中心とした職員研修を夏季休業等を利用して2回以上実施する。 ・研修を適宜実施していくことで、タブレット、「e-ライブラリ」等の活用の能力を高める。 ・ICT支援員に授業に効果的なコンテンツを探してもらおうなど授業支援を積極的にしてもらうことで、ICT機器活用能力を高める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・☆電子黒板やタブレット等の機器を活用した授業づくりに積極的に取り組んだ結果、指導法の工夫により「わかる授業」が進んできた。児童アンケートでは8割を超える児童がICTを使った学習が分かりやすいと回答している。 ・★各職員は機器活用能力を高めるため、校内研究や日々の取り組みで自己の研鑽に取り組んでいるので、共有する場を設ける必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員研修を断続的に実施して、電子黒板やタブレットの活用事例をもっと周知し、それぞれの実践例を交流したり悩みを相談したりすることで職員の技能の向上を図る。よりICT機器を効果的に活用できるようにし、分かりやすい授業づくりをめざす。 ・ICT支援員が効果的に授業支援に入ることができるよう年間指導計画を立てる。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

⑤ 時代のニーズに対応した教育の推進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	到達度	成果と課題	具体的な改善策・向上策
教育活動	○特別支援教育の充実	特別支援教育の支援体制の充実	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援教育コーディネーターを中心として校内支援委員会の活性化を図る。 個別の支援計画・指導計画に基づき、児童のニーズに対応した指導・支援をめざす。 交流学級との連携をとり、全校児童の融和的児童交流を促進する。 教職員全体の専門性の向上と校内支援体制の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童支援研修会を年4回実施し、児童理解と適切な支援を行う。 QUアンケート結果をもとにした校内支援のための協議会を開催する。 特別支援担当教員と学級担任で連携して、交流学級での円滑な活動に努める。 夏季休業中に「発達障害のある児童に対する支援」「個別の教育支援・指導計画」についての職員研修を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ☆Q-Uの結果を受け、支援会議では児童の支援の方向性について話し合うことができた。保護者面談等の機会を利用し、家庭とも連携を図りながら個別の支援ができた。気になる児童については、児童支援研修会を開催し全職員で共通理解を図り、組織的に関わられるよう努めた。 ☆嬉野特別支援学校による巡回相談を指導を受けたことで、担任の学級経営に生かしたり通級教室へつなげたりすることができた。 ☆支援が必要な児童に対して、スクールカウンセラーを積極的に活用し、家庭とも密な連絡調整をしたことで早期に専門機関へつなぐことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回相談に関しては、日頃から各学級の担任と情報を交換し、できるだけ早く依頼ができるようにする。 ・個別の教育支援・指導計画については、担任が書く時間の確保をし記入しやすい様式にしていく必要がある。 ・支援計画を定期的に見直し、児童の個性に即したのか、効果的な支援方法か等について専門機関から助言を得ながら支援の充実を図っていく。 ・交流学級の担任との話し合いの時間を意識的にとるようにする。

⑥ 健やかな体を育む教育活動の推進

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	到達度	成果と課題	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	運動習慣の改善や定着化	<ul style="list-style-type: none"> 児童の運動習慣の形成や運動意欲を高め、体力向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 新体力テスト等で児童の実態を把握し、落ち込みの見られる運動を重点的に行うなど指導計画を見直し、授業実践につなげる。 委員会活動や縦割り活動と連携した「運動集会」等を企画し、運動意欲を高めたり、外遊びの奨励につなげたりする。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ☆児童の学校評価では、運動を進んでしていると肯定的に回答した児童は8割以上であり、本校の児童は運動意欲が高く、外遊びを好んでいると言える。 ☆新体力テストの落ち込みがみられる分野を取り入れた運動を企画したり賞状を準備したりして、昨年度よりも参加者を増やす工夫ができた。 ★新体力テストの結果を把握し配布したが、全校で共通理解の場を設定することができず、実践へとつなげることができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外遊びを奨励するための手立てを検討し、職員で共通理解を図る。 ・「スポーツチャレンジ」などを利用した取組などを運動委員会の活動の一つとして取り入れ実践につなげる。 ・体力テストの結果をもとに、児童の実態や体育の授業実践について意見交換をする時間を設け、体育科授業の充実を図る。
		望ましい食生活習慣	<ul style="list-style-type: none"> 食育指導を計画的に実施し、「食」の自己管理能力とマナーの向上に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月の給食の目標を意識した指導を行う。 ・「ときわっ子体験活動」や道徳、学級指導等と関連させて、食の重要性や食に関わる人への感謝についての指導を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ☆毎月の給食目標に加え、その日の献立に関わる内容の放送をすることで、日々児童が食に対して意識をしながら食べることができるよう指導することができた。 ☆給食試食会やバ給食週間及び6年生のバイキング給食では、本校の給食体制や給食ができるまでにかかわる人々への感謝について指導ができた。 ★給食の残菜はほとんどなく、よく食べているが、マナーについてはもう少しのところも見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の児童の家庭を含めた食に関する実態を調査・把握し、児童の実態に即した内容の食育指導をすることで、より興味・関心をひくものとなるよう努めていく。 ・毎月の給食の目標の意識づけの継続については月半ばで再度放送を入れ実践ができているかどうか意識の喚起を行う。 ・給食委員会の活動を活発にし、全校に向けて食の重要性や食に関わる人への感謝について考える機会を発信する。 ・道徳や学級指導における食育指導の実施状況を明確化し、今後の指導の参考となるよう記録していく。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

学力向上の取組の成果があがり、保護者アンケートでも基礎学力の向上や分かる授業の工夫の評価も上がっている。心の教育に関して、道徳教育を中心とした取組が不十分な面があり、保護者の期待に沿うように努める必要がある。次年度は、校内研究を深化・拡充させながら職員の授業力向上を図っていくとともに、体験活動や地域とのつながりを生かした道徳教育や人権教育の充実を図っていきたい。また、今年度スタートした官民一体型学校の取組についても、学校支援地域本部との連携をさらに深めて、より充実した学習へとつなげていきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目